

# 大学生の未来展望と生き方・アイデンティティ



松岡 信義

美作大学・短期大学部

## はじめに

■ 本稿は、本誌編集者から依頼された執筆テーマをそのまま標題としているが、それは、このテーマが日ごろ筆者の胸中に去来してわだかまる関心事に少なからず触れる部分があることから、この機会に自らの関心事をこのテーマによって照射し、わだかまりの底にある想いに形を与えてみたいと考えたからである。

## 未来展望という営為

さて、未来を展望するといふとき、そこには「方向」の意識がつきま

とう。山頂や観光地の展望台に立つて景色を眺めるのとはちがって、展望しようとする未来には何らかの人為が織り込められるのを予想するからだ。山頂や展望台からは結果としての現在―眼前の景色―を眺めることが出来るが、未来は現前してはいない予想であり、その予想は何らかの手掛かりないし根拠を条件としている。未来展望という言葉は、航跡によって船の進路が見て取れるように、あるいはホワイトアウトの雪原で、適当な間隔において標識布を結びつけた竹竿を突き立てながら進むように、振り返って見る足跡から進むべき方向を見通そうとする、そのような営為を孕んでいる。

## 学生の未来展望力の形成と教員

未来を展望する主体が学生であるとき、日々

その学生たちを相手にしている大学教員が、学生の主体形成に少なからず影響を及ぼし得る存在であることは疑い得ないだろう。もし、大学教員が彼ら学生の主体形成に何らの関わりも持ち得ないということであれば、大学の構成員としての括りにおいて両者を語ることは出来ないし、本誌のネーミングである『大学と教育』も意味をなさないことになる。「大学生の未来展望と生き方・アイデンティティ」



まつおか・のぶよし ●一九五〇年、島根県生まれ ●主な著書・論文に、「経験の組織化と教育―Deweyの『経験』概念の検討にふれて―」、『東京大学教育学部紀要』第一八巻、一九七九。

「アメリカの児童研究運動 (Child Study Movement) ―その思想と性格―」『教育学研究』第四九巻四号、一九八二。「アメリカの児童研究運動 (Child Study Movement) の生成条件」『神奈川大学心理・教育研究論集』第一号、一九八三。「子どもの遊びを考える」『保育原理』(幼児教育・保育講座二、丸尾・八木・秋川編、福村出版、一九九七。「基礎」概念の整理を踏まえたカリキュラムの編成―大学(短期大学)における教養教育と改正保母養成教育課程―」『短期大学教育』第五〇号、日本私立短期大学協会、一九九三。

のテーマで要請されているのは、大学における教育が学生の未来展望力の形成にどのように関わるのかという問い、その問いの扉を開く試みのだろう。

### 未来展望と生き方と

#### 「個」の自覚

ところで、先に未来展望には「方向」の意識がつきまとうと言ったが、「生き方」は生き行く方(方向)でもあるのだから、未来展望と生き方とは切り離しては考えられない。生き方を問題にするには、もちろん、個としての自分自身を自覚することなしには出来ないから、ここに個の自覚としてのアイデンティティも合わせて論じられることになる。

#### □ 学生を見る目

筆者の勤務する大学は学部と短大の併設で、学生数は全学(学部・短大)合わせて千三百名余りである。大正四年創設の津山高専裁縫学校以来の女子教育の伝統であったが、二〇〇三年の男女共学化で、それまでの大学、短大の名称から「女子」が外されて、それぞれ美作大学および美作大学短期大学へと名称変更された。筆者の現在の所属は短大(幼児教育学科)であるが、都合により所属変更が

なされる場合があるだけでなく、現在の所屬にありながら学部の授業や卒論指導はもとより、学生指導や、各種委員会をはじめ入試業務や就職支援、学生募集など、学内諸業務は大学・短大一体となって取り組む関係上、教職員全員が大学・短大の双方を本務としている状況である。大学は一学部で、「食物」「児童」「福祉環境デザイン」の三学科が、短大には「幼児教育」「栄養」の二学科がある。

### つい語ってしまう学生像

さて、昨年の今頃(二〇〇五年六月)、大学の広報誌に、筆者が筆名で書かせて貰っているコラムに次のように書いた。

日頃学生と向き合っていると、授業や学生たちのレポートで扱われる言葉をめぐって、ちよつとした面白い(?)現象に行き当たる。

たとえば、教育の法規に関するときなど、「女子少年」と「国民はその保護する子女に」といった表現における「女子」と「子女」のように、熟語の前後の文字が転倒すれば意味が変わるものがかかなりあるのだが、そのことについて彼らがあり頓着しないことを不思議に思うことがある。習慣と慣習、権利と利権、決議と議決、実情と情実、近親と親近……など。

もつとも、「議決と決議」や「権利と利権」などの対には、それぞれに一部が重なる意味もあるから、混同と無頓着が同居することになるのかも知れない。それにしても、実情と情実では相当意味も異なるし、ましてや「あの人たちの事情」と「あの人たちの情事」とでは、それこそ事情は一変するほどのものかも知れないことを思うと、とても誤植程度の認識では済まされないだろうに、と思ってしまうのだが。

発音するだけでなく、文字にする場合でも「すいません」と書く学生がとても多い。喫煙しないという意味ではない。「済みません」という表記を元々知らないらしいのである。あるいは、一文字一文字は知っていても、繋がる丸反対の解釈をくだすのを見て、この先大丈夫かなと案じてしまうこともある。「天地無用」をどう転がしてもよいとする解釈から、「親展」を「開封するのは親でなければならぬ」と確信している者は想像を絶するほど多い。

大学にあって「生徒」と自称することの多い彼らに、まず「講議」とだけは書かないで! ということから始めることにしている。

今に始まったことではないが… 何をいまさら、と思われ

れるかも知れない。学生の学力の低下が言われ出したのは今に始まったことでは

ないし、年々幼稚化する学生の意識や行動に頭を悩ませて  
いるという教員の話など珍しくもない。ここに挙げた例な  
どまだマシなほうだと言われるかも知れない。何しろ同世  
代の九七パーセントが高校に通い、高校卒業者の五割以上  
が大学・短大に進学する時代である。指定校入試やAO入  
試など選抜経路は多様であるが、現象としては、さながら  
義務教育の線上に小学校、中学校、大学・学校とトコロテン式  
に送り出され、送り込まれて来る観がある。いきおい、義  
務教育でなし得なかったことは高校での教育に先送りさ  
れ、高校でも補完し切れなかった基礎学力や規範意識や社  
会通念は大学でのケアに望みをかけられるということにな  
る。実際、高校の進路・進学担当者が推薦入学を希望する  
生徒の送り込み先として、入学後にどれだけキチンと補習  
授業をやってくれるかということ大きな指標にしている  
ことは関係者の間で広く知られている。ために学生募集に  
躍起となっている大学にあって、補習授業のカリキュラム  
を組み立てることは喫緊の重要事となっている。「大学等  
での補習授業はリメディアル教育という呼称でよばれるこ  
とが多い。日本リメディアル教育学会というのが昨年（二  
〇〇五年）誕生し、秋には第一回全国大会が開かれている。  
リメディアル remedial とは、①治療（上）の、②矯正「改

善」するための、という意味の形容詞（岩波新英和辞典）  
であるが、平たく言えば大学生向けのやり直し教育という  
意味である。」

なぜ生徒（さん）なのか

こういつた状況では、学問に  
生きる気概の匂う「学生」と  
いう呼称はそぐわないとしても感じられるのだろうか。気に  
なるのは、当の学生たちだけでなく、大学に出入りする地  
域の方々―役所や事業所、あるいは書籍・教材を扱う書店  
や商店、果ては社会の一線で活躍されている関係で本学に  
お招きしている非常勤講師の方々まで―が、本学の学生を  
「生徒（さん）」と呼ぶケースが年々増えて来ているように  
思えることである。これは何も本学のような地方大学の学  
生だけが実社会の人々からそのような意識で見られている  
ということではないと思う。

「泣く、土下座する、  
味をしめる」

今から七年前に出版された清水  
真砂子『学生が輝くとき』（岩  
波書店、一九九九年）のプロロ  
グはこの標題で始まっている。この標題に続く数ページ  
には当今の学生の实態が活写されていて、出版直後に読ん  
だとき以来、筆者は強い印象をもっていたが、いま読み返  
してみても、あらためて学生に対応する過程での著者の困惑、

憤懣、情けなさ、やりきれなさ、敗北感；等々が滑稽なほど見事に伝わってきて著者への共感を新たにします。こんな描写である。

十年ほど前のこと、ある時、授業でひとりの学生が泣きだした。弱い立場の人間をいとも簡単に切つて捨てようとする彼女の発言に私が意義を唱えた。ただそれだけのことである。――(略)――授業のあと、その学生に泣きだしたわけをたずねると、彼女は、他人に叱られたのはあれが初めてだった。生まれて二十年、父にも母にも一度も叱られたことはなかったのに、と答えた。私自身は叱つたつもりなどなかったのだが、その時、初めて私は、そういう若い人たちが出てきていることを知った。

子どもが叱られるということは、自分のしたことに対してリアクションを受けることであり、それは他者を知る一歩であり、かつまた責任をとることを学ぶための一歩ではないかと思うのだが、ここ十年、この叱られるという体験を一度もしてこなかったのではないかと、と思われる学生たちに会うことは年を追って多くなっている。

――(略)――

毎年、とくに学年末になると、とてつもない学生に出会っ

てしまう。提出すべきレポートを全く提出していなくても、出席すべきクラスに一度も出席していなくても、単位だけは何とかしてくれとごねる学生たちである。――(略)――調べてみると他の教科では、どんなに欠席が多くても、レポートを出してなくても、すでに単位が出ていることがわかる。別のレポートを課したとか、特別指導をしたとか、理由はさまざまである。別のレポートが課せられれば、もうしめたもの。ほぼ百パーセントすべりこめる。彼女らは味をしめたのである。泣けば、土下座すれば、単位を出してくれる先生がいる。こうして彼女らはすりぬけていく。大学に限らない。高校の時からすでにそうやってきたふしがある。『学生が輝くとき』――五頁、傍点原著

「学生が輝くとき」  
が見える目を

プロローグはこのような描写で始まるけれども、この本の基調はまったく正反対である。このことを先ず急いで言っておかねばならない。清水氏はこのような学生の現実から出発しながら、この本全編を通して、タイトルにあるように「学生が輝くとき」を自らの教育実践を経る中で拾い上げ、丹念に磨き上げて紹介している。学生を語って肯定的な評価が聞かれない当今にあつて、だから

こそという思いが推進力となったものでもあろう。この本の「あとがき」に、ゼミで清水氏に褒められた学生が照れ隠しに「先生は親ばかみたいなどころがあるから」と言ったことに対して、「あら、親ばかできなきゃ、子どもは育たないのよ」と言い返したというくだりがあるが、「親ばか」的な目でこそ見えてくる学生たちの姿というものが確かにあるだろう。あえて言えば、いま私たち大学教員に必要なのはこの「親ばか」的な目を持ち得るかどうかということであるかも知れない。

### ㊦ 学生が求めているもの

現在、わが国には七百校を超える四年生大学と五百校近い短大があり、両者を合わせて同世代の五割を超える若者を迎え入れている。ひと頃「せめて高校までは出てないと」という言われ方が就職と結びつけて言われたように、今日、大学・短大のどの学部、学科へ入学しようとも、入学時点にあつて卒業後の就職を意識しない者は殆どいないだろう。不況、失業率、ニート、フリーター、非正規社員、派遣社員、長時間労働、サービス残業、過労死：等々、雇用状況と生活基盤についての不安が大きな社会問題となつて

いるだけに、卒業したけど就職は…ということにならないよう、進路の探索にはシビアナ目が求められる。

#### 親子で違う眼力

しかしこの点での眼力は親子の間で相対的に開きがある。先の「せめて高校ま

では」というのも、中学卒業時点での子ども自身の意識ではなく、その子どもの親たちの世代の意識によるものであった。高度経済成長期に「金の卵」と言われてもてはやされ、中学卒業で集団就職して日本経済を陰で支えた世代が、我が身を振り返ってみた時に口をついて出たのが「せめて高校までは」だったのである。そして親たちが、連綿とではあるがこぞって我が子を高校へ行かせるようになった結果、今日では中卒者の九七パーセントまでが高校へ進学することになった。これと同じ構図が当てはまる。つまり、大学や短大への入学に際して、その大学ないし短大卒業者の就職実績にシビアナ目を向けるのは、これから入学する当の子どもよりも、むしろその親たちの方だということである。「お前の好きなどころにすればいいけど、いいのかい、その大学出てめちゃんと仕事に就けるんだろね」「就職出来るんだったら、いいよいいよ、どの大学行っても。」もちろん入学当事者である子ども（学生）も、将来の進路に関わることだから、無関心であるはずがない。無関心

であるはずがないけれど、関心の抱き方が親とは違うのである。誰でも自分が入学する大学について先ず知りたいことはその内側のことである。何しろ、入学すればそこは自分の生活の場となるからである。やりたいことが実際の授業ではどんな風に行われているか？ 授業は厳しいか、楽しそうか、自分がついて行けそうか？ 施設や設備にはどんなものがあつて、どう利用されているか？ クラブ活動は活発か、入れそうなのはあるか？ ……等々。そして、これらのことに関心を振り向ける前提として、そもそもその大学に入れるか？ 要するに、これから入って行くこうとしている生活の場の、まずは入り口と、そしてそれに近接する内側への関心が強く、出口としての就職についての意識は、今のところは裏木戸の扉のように、彼方にあつて半開きにパタパタしている風のものでしかない。

### 「ユニバーサル」と 「全入時代」

さて、大学改革や高等教育が問題にされるときに読んだり聞いたりすることの多い「エリート」「マス」「ユニバーサル」という言葉があるが、これは、アメリカの高等教育研究者マーチン・トロウが一九七〇年代に提唱した高等教育の性格変化のモデルを表す言葉である。大学等高等教育への進学率が一五パーセントまでをエリー

ト型、五〇パーセントまでをマス型、五〇パーセント以上をユニバーサル型というのであるが、これによると日本は昨年（二〇〇五年）、大学・短大進学率が五一・五パーセントと、ついに五割を超えてユニバーサル型に突入した。十八歳人口が減少していることもあるが、二〇〇七年には、単純計算で進学希望者数と大学・短大の総定員数が同じになる、いわゆる大学全入時代の幕開けとなる。実際には受験生が押し寄せる難関大学は依然として難関であり続けるだろうし、独立法人化されたとはいえ国立大学は依然としてコクリツで、当分は希望すれば誰でも入れるというものではなからう。むしろ全入時代はよりいっそう大学の序列化を際立たせることになると予測されている。

ところで、大学・短大は、この大学して押し寄せてくる学生たちに何を提供することができるか。「何を」とは、端的に、本稿のテーマである「大学生の未来展望と生き方・アイデンティティ」に関わつての「何を」である。

### 学生の内なる叫び

大学・短大には様々な学部・学科があるが、そのいずれも研究・教授にあつては専門性をレベルや程度に差はあるにしても、追求ないし標榜している。そして学生は入学以来、自分が所属する学科で専門教育を中心にして卒業までの学生生活を

―たとえ不本意入学であっても、あるいはこれといった目的をもっていないなかったとしても―送るわけである。しかし同時に、多感な青年期にあつて、また往々にして高校までの日常を抜け出たそれまでと異なる環境の中での他者との交わりの中にあつて、自己におののき、生き方に迷い、時には世を厭い、自分を責め：と、今昔変らぬ「疾風怒濤」の時代を過ごす。この疾風怒濤を生きる学生に対して、大・短大は何を提供できるのか。

「僕は、全体としての人間だ。僕が全体として自己形成するのを助け、僕のほんとうの潜在力を發揮させて欲しい」。しかし大学には彼に返す言葉がないのだ。

これは、アメリカの大学における一般教養教育を担当するアラン・ブルームの、ある学生の言葉を前にしての真率な自問、苦渋にみちた反省の弁として、廣川洋一氏が紹介しているものである。（廣川洋一『ギリシャ人の教育』岩波書店、一九九〇年。七頁）。廣川氏は大学における一般教育・教養教育のあり方を論じる文脈の中で先の紹介をしているが、彼の主眼は次の点にある。すなわち、「わが国での一般教育・教養課程は、アメリカのそれとは異なる点は

あるとはいえ、そのあり方にたいして、基本的に、同じ問いが学生から問われうるとみななければならない」（同書、七頁）ということである。もつともブルームの言葉も、そして彼を紹介している廣川氏の言葉も、アメリカの大きな大学（コーネル、イェール、シカゴ大学など）や「わが国の有力大学」の一般教育・教養教育を論じる中から出てきたものであるが、しかし、「疾風怒濤」を生きる学生は大学の大小や有名無名に限らず遍在する。私の、そして、あなたの前も、その渦中にあるのだ。

魂の世話としての  
教養（教育）  
学・短大はどのように受け止めうる  
のだろう。紹介してくれた廣川氏自

身は次のように言う。

この学生の叫びは、教養の指し示す方向、おそらくその重要なひとつを明示するものであり、他方、教師たちの困惑の沈黙は、教養ある人間―かの学生の声によれば「全体としての自己形成」―に育てるにはいかなる教育がなされるべきか、その方法の計りしれぬ困難を語るものであろう。（同書、八頁）



重ねて「何を」と問わねばならない。このような状況にあって、大学・短大は学生に何を提供できるのか、と。自覚的に学部・学科を選んで大学・短大にやって来る学生はもちろんだが、不本意入学であっても学生となった以上、求められ、あるいは課せられるのは、自分が所属する学部・学科での専門的知識や技術・技能等の習得である。そして、それらは卒業後の将来の生活上の資源となりうるものであるから、習得することへの意欲の程度に差はあろうとも、入学時点での最大の要素であるに違いない。しかし、入学と同時に生活の場となる大学・短大にあっては、そこが生活の場となるが故に「疾風怒濤」が日常的に繰り広げられる舞台となる。それは「専門」に関わる勉学の合間や、場合によっては正に専門教科の授業中であつてさえ、そうなのである。疾風怒濤を乗り切り、「全体としての自己形成」に資する営為を教養（教育）とするならば、それは専門教育だけではなし得ない道理である。先の著書で廣川氏が引用している養老孟司氏の次の言葉も、このあたりを突いていると思われる。

私は一種の教養主義の復活を予感している。私の属する医学の分野でも、専門主義では、おそらく片付かない問題が山

積している。それは、専門主義でやって来た以上、当然のことである。教養主義が（積み残し）になったからである。それを考えるノウハウを、専門主義はもたない。（同書、三頁）

「叫び」とは魂の発露である。魂の世話が教養（教育）に委ねられるものとして、では、いかにしてなされうるのか。

### 目 「自分が在る」ことを問い、問わせること

差し当たって確認しておかねばならないことがある。現在の大学・短大にあっての教養教育の位置である。

#### 不遇をかこつ

一九九一年の大学設置基準・短大設置基準の改正の目玉となったカリキュラムの

#### 教養教育

大綱化・弾力化は、大学・短大の教育内

容に多大の影響をおよぼすものであった。これら設置基準の改正を受け、全国的に雪崩をうって、一般教育・教養教育における科目が削減または廃止され、あるいは専門科目の入門的科目や専門科目そのものと差し替えられるようになった。専門教育充実のかけ声のもと、一般教育・教養教育の実質的空洞化を招来することになったのである。こ

のことは設置基準改正の前から懸念され、予想されたことであつたが、年を経るごとに次第にその弊が顕わになり、近年になつて大学・短大における教養教育のあり方を巡つての論議が巻き起こっている。しかし、カリキュラム編成にみる成果には大学・短大による格差が大きく、一般教育・教養教育が九一年の設置基準改正前に占めていた地歩とは大きな隔たりがある。

ところで、魂の世話が教養（教育）に委ねられるとしても、大学・短大の設置基準改正前の一般教育・教養教育ではとてもその役目を果たし得なかつた。設置基準の改正による一般教育・教養教育の空洞化を懸念する者たちにあつてさえ、当時の一般教育・教養教育の不十分さと機能不全は明らかであつて、これを憂慮する声は方々で上がつていたものの、さりとて有効な手立てを持ち得ない状況の中で設置基準が改正された、というのが正直なところだろう。

私たちは

STEPです！

あらためて学生の現実に立ち戻るところから考えよう。もう一度、本学広報誌のコラムから、同じく筆者によるものであるが、今度は数年前の時点での素描を引かせていただくことにする。

既に廃刊になつてしまつたが、毎日新聞社が発行していた月刊の教育雑誌に『教育の森』というのがあつた。その一九八二年三月号で、法政大学教授の尾形憲氏が大学と学生について苦言を呈していた。曰く。大学は「最高学府」だとか「学問研究の場」とかいうことになつており、学校教育法でもそのように規定しているが、そうしたタテマエとは裏腹に、現実の大学がおおかた若者たちのレジャーセンターになつていくことは否定しようがない、と。

学生に言わせれば、それは激しい受験戦争の疲れをいやす「青年幼稚園」だそうだ。前期二年間は教養課程ならぬ休養課程であり、後期二年は勉強なんかちつともセンモン課程（これも学生に言わせると、勉強なんかする気がセンモン課程）となる。三年次はアルバイト課程で、四年次は就職課程ともいう。結局、大学で学んだのは、PTA（パチンコ）、タバコ、アルコール）だったり、STAMP（セックス、タバコ、アルコール、マジジャン、パチンコ。一説では酒、タバコ、アルバイト、モーターカー、パチンコ）だったりする。

さて、この「苦言」を、とある機会に本学の学生に紹介したところ、ややあつて、思いがけないリアクションを受けた。四、五人のグループが一団となつてやつて来て、そのうちの一人が晴れ晴れとした笑顔で、手にしていたメッセージを差

し出したのである。

最後の授業で、今の大学生はSTAMPといわれている、と先生が言われた。現実そうなのかと納得してしまうが、友達と話していて、私たちはSTEPだという結果になった。

Sはスマイル、TはTeachingでおしゃべり、Eはeatで、Pはプライドといった意味をつけた。良い意味で大学生活をのびのびとくらしたいし、のびのびとした人間でありたいと思う。

(一九八七年度入学生 児童学科)

あれから十二年。「ひと回り」あとの世代の今の学生は、どんな反応をするだろうか。

この学報の発行(一九九九年九月)から、かれこれ七年が経っている。コラムの内容は今から十九年も前のことであり、尾形氏の「苦言」から数えれば二十四年という、すこし誇張すれば一世代前の学生の姿である。現在と比較してどうだろう。それこそ「教養課程」(休養課程！ 学生たちは言い当てていた。)と「センモン課程」という制度上の垣根が緩やかになり、「PTA」にあたる部分に変化はあろうが、学生の〃生態〃ということではあまり変わっていないとみることもできよう。しかし、注目したいのは「私たちはSTEPだ」と言った学生たちの意識である。

### 未来展望力の芽を育てる

私たちはSTEPだ、と言ったとき、学生たちは自己分析を試みたのだ。たとえ、それが客観的因子に基づいているとはいえず、むしろ自分たちにとって望ましく、こうありたいという願望に導かれてのものだといわれるにしても、少なくともそこには、現在の自分を対象化し、自分自身を頼りに足るものとする自覚と、「のびやかさ」という、漠然とはあるが自分たちの価値を付与したものを求めて行こうとする方向性がある。こういったところに未来展望力の芽があると思う。そのことをもう少し掘り下げて考えてみたい。

### 自分はどうして

### 此処にいるのか

筆者は先に、未来展望には「方向」の意識がつきまとうと言い、また、振り返って見る足跡から進むべき方向を見通そうとする営為を孕んでいる、と言った。このことに関わって紹介したいことがある。それは、阿部謹也氏がこある機会に述べている次のような実践であり、その実践を支える考えである。

私は学長になるまで一・二年生のゼミナールをも担当していた。――(略)――私のゼミナールは最近では「西欧における個人の人格の成立について」という題で『個人の発見』とい

う英語の書物を読んできた。通常はその書物をめぐって議論をし、特に日本の個人の方との違いを話し合うのだが、夏休みには二泊三日の合宿をし、そこで十五人の学生が一人ずつ「自分はこうして此処にいるのか」と言う題で一時間ほど報告をする。もちろんそのような報告をしたくない者は自分が興味をもった書物や音楽、その他を報告すればよいのだが、これまではほとんどの学生がこの題で報告をしている。

おそらくほとんどの学生にとってはこのようなことを人の前で話すことも、またそれを文章にして書くことも初めての経験であろう。まずは親との関係、そして高等学校の教師との関係、友人関係や大学に進学する際の事情などが問題となることが多い。アラン・シリトーという小説家は、人間は二十歳になるまでの経験で四十歳まで生きてゆけると述べている。二十歳までの経験が人にとっては決定的に重要だといっているのである。私も自分自身の経験から、二十歳までの自己形成のあり方が決定的に大切だと考えている。こうして十年以上学生たちの話を聞いてみると、このようにして自分の生活史を書くことによって自己が対象化されることが大切なのだとということが解<sup>わか</sup>ってくる。(阿部謹也『大学論』日本エディタースクール出版部、一九九九年。五〇六頁)

### 自分に引き寄せて 関わる意味

ここに引用した箇所のすぐ後のところで、阿部氏は、このようなやり方で自分を知らうとする試みをする機会<sup>な</sup>はわが国では意外と少ないこと、また、自己の形成史を辿<sup>たど</sup>って見たときに見えてきたことが多くの人に共通する問題であることに気づくことも少なくないとし、このようにして社会と自分との接点が見えてくる、と述べる。そして「世界との接点<sup>な</sup>が他律的ではなく、自分の努力によって見えてきたとき、その人の学問の基礎が出来たことになる」(『大学論』七頁)と言う。また、最近の学生が政治や社会の問題に関して無関心だとよくいわれることに対して、阿部氏は、かつての学生には自己の問題をいわば棚上げして天下国家を論じる傾向があったが、今の学生たちは自己の問題から離れることなく、もっと地道に天下や国家を自分に引き寄せて関わり<sup>な</sup>うとしていると言い、「そういう意味でこのような視点こそが大切なの(だ)」(同書、七頁)と言う。そして、この考えを敷衍して次のように断言し、希望を述べる。

だがそれは学問の場合だけではない。社会人としても大切な基礎なのであり、生涯学習や社会教育の基礎ともなるので

ある。その意味でこのような試みが学生だけでなく、成人した人々の間でも行われることを希望したい。(同書、七頁)

学生だけでなく、成人した人々の間でも、と阿部氏が言うところの希望。それは自分を棚上げにして論じることではなく、自分を取り巻く日常的なことから天下・国家にいたるまでも、自分に引き寄せて関わりとうとする姿勢であり、自分の努力によって世界との接点を見ようとする営為の遍在ということである。そのことは、学生にあっては大学・短大での自分の眼前に展開する学科目に向かう意味を問うことでもあるし、「疾風怒濤」を乗り切るときに握る舵への力の入れ方や方向感覚を養うことでもある。自己形成のあり方という航跡を振り返ることで、進むべき方向を見通す(Ⅱ未来展望)ということである。

オリジンを  
持つことを  
励ます

このように考えるとき、「私たちはSTE Pだ」と、いかにもアツケラカンと言いつたかに見える学生たちではあるが、存外、このようなどころに見られる、ささやかではあるが生命力の感じられる未来展望力の芽にこそ、私たち教員は目を止め、その芽を育てることに意識的でないばならない、と思う。

その際に配慮すべき大事なことは、「オリジンオリジンは自分自身のなかにある」という意識を、学生がしつかりと持つことを励ますことだ。一九九五年の阪神・淡路大震災の折り、救援活動に、全国から学生たち若者が多数かけつけたが、彼らを突き動かしたのは、一人ひとりの胸の内に噴き出した止むに止まれぬ思いであつたろう。一人ひとりが自らのオリジンから発したのである。普段の日常にあつても同じである。自分自身のなかにオリジンを自覚するとき、たとえ他の者と同じ結果に行き着いたとしても、それをもってオリジナリティーがない、という言い方でなされる評価は当を得ていないだろう。

オリジンとは「私」に発する「かけがえのないもの」である。世界がグローバルイズムに浸され、人々の生活の襞までもその大波に洗われている今、架橋「グローバルイズム」という架橋！によって踏みつけにされた橋脚としての島々が二重写しになる。固有の文化と習俗を育み、不便だとしても不幸せとは限らず、点在するがために全体として多島美をなしていたエリアに架けられたハイウェイ。中空に架けられて貫通する海上ハイウェイは、島々を見おろして人と物を遠くに運ぶが、橋脚となった島々の文化や習俗に目を留めることはほとんど、ない。目を留めないどころ

か、それら島々の文化や習俗は急速に洗い流され、風化されて行くことだろう。たとえて言えば、私たち一人ひとりにして、学生たちも―はこの橋脚の島の出身者である。オリジンはそのにあるのだ。生き行く方に迷い、展望を見失おうとするとき、立ち止まって考えてみてはどうだろう。島での私は何であったのか。島を出るとき何をめざしていたのか、と。そして島を出てからこれまでの航跡を辿ってみることで、海図の上に現在位置を確認し、生き行く方を展望できるのではないか。

originとは、起源、発端、源泉であり、生まれ、素姓という意味でもある。未来展望が、自己形成のあり方という航跡を振り返ることでなされる以上、そして大学における教育が学生の未来展望力の形成に預かる以上、教員に先ず求められるのは、学生が、世界に向かって立つとき、自らの内にオリジンをもつことを励ますことであるだろう。

## ■ おわりに

筆者は、先に、清水真砂子氏が指導するゼミでの、学生と清水氏のやりとりを紹介したところで、「いま私たち大学教員に必要なのはこの『親ばか』的な目を持ち得るかど

うかということであるかも知れない」と述べた。オリジンが「生まれ」「素姓」であり、そのオリジンを励ますことが求められるのであれば、これはもう「親ばか」で在らざるを得ない。

禅宗に「碎啄そくたく」という言葉があるが、これは雛ひなが孵化するときに、外に出ようとして卵の内側から殻を破ろうとしてつくくことを「碎」と言い、そのとき親鳥が、雛ひなが出やすいように外から卵をつつくことを「啄」と言うことに拠っているという。「機を得て両者相応すること」（広辞苑）であるが、学生の未来展望力の形成にヒントを与える言葉であると言えよう。

